

NEW JAPAN
*P*HILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2023/2024シーズン



2024
3
March

2023/2024 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 3月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ/サントリーホール・シリーズ #654 相埒ひろ	1
すみだクラシックへの扉 #21 小室敬幸	7
楽員ストーリーズ ㊟ 日高タチ (ヴァイola)	13
NJP from Inside	14
2024 / 2025シーズン 柴田克彦の注目ポイント!	18
2024 / 2025シーズン 定期演奏会プログラム	24
お客様からの声	31
室内楽シリーズ	33
「パトネージュ・システム」のご案内	38

■ 特別支援企業

- オリックス
- ii 豊島
- CCC
- 大和証券
- 東京東信用金庫
- NOMURA
- フジサンケイグループ
- 三井住友銀行

■ 特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

特別支援企業/団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

〈コンサートの感想をお寄せください〉

演奏会終了後1週間以内にご回答いただいた方の中から、抽選で10名様に新日本フィルオリジナルグッズをプレゼント!

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。プレゼントの当選者にはメールにてご連絡させていただきます。culture@njp.or.jpからのメールが受信できるようご設定をお願い致します。

<https://forms.gle/nzYkJLAuZGI1fYY36>



いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。

(ご来場のお客様へのおお願い)



3.2 [土]
トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第654回定期演奏会
2024年3月2日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

3.3 [日]
サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第854回定期演奏会
2024年3月3日(日) 14時00分
サントリーホール

● 細川俊夫 (1955-)

月夜の蓮 — モーツァルトへのオマージュ — *

Toshio Hosokawa: Lotus under the Moonlight
— homage à Mozart — for piano and orchestra *

約20分

—— 休憩20分 ——

● ラフマニノフ (1873- 1943)

交響曲第2番 小短調 op. 27

Sergei Rachmaninoff: Symphony No. 2 in E minor, op. 27

約50分

I. Largo – Allegro moderato

II. Allegro molto

III. Adagio

IV. Allegro vivace

[指揮] 秋山和慶

Kazuyoshi Akiyama, Conductor

[ピアノ] 児玉 桃 *

Momo Kodama, Piano *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール [3/2公演]

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造団体支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会
一般社団法人授業目的公家送信信託金等管理協会(SARTRAS)

プログラム料計、券料増設等をお知らせの案内書は、演奏中に配らないようお願いします。
演奏途中での入場、場内での飲食および撮影はご遠慮いたします。



Profile



©福田力也

秋山和慶 [指揮] Kazuyoshi Akiyama, Conductor

齋藤秀雄のもとで指揮法を修め、1963年桐朋学園大学音楽学部を卒業。1964年東京交響楽団を指揮してデビューののち同団の音楽監督・常任指揮者を40年間にわたり務める。その間、アメリカ響音楽監督、バンクーバー響音楽監督(現在桂冠指揮者)、シラキース響音楽監督、大阪フィル首席、札幌首席、広響首席、九響首席などを歴任。また、NYフィル、ボストン響、クリエブランド管、シカゴ響、フィラデルフィア管、スイス・ロマン管など世界の一流オーケストラに客演している。これまでにサントリー音楽賞、芸術選奨文部大臣賞、大阪芸術賞、毎日芸術賞、川崎市文化賞、京都音楽賞大賞などを受賞。2001年紫綬褒章、2011年旭日小綬章を受章。2014年度文化功労者に選出。

現在、中部フィルハーモニー交響楽団芸術監督・首席指揮者、日本センチュリー交響楽団ミュージックアドバイザー、岡山フィルハーモニック管弦楽団ミュージックアドバイザー、東京交響楽団桂冠指揮者、広島交響楽団終身名誉指揮者、九州交響楽団桂冠指揮者、オオサカ・シオン・ウインド・オーケストラ芸術顧問など多くの任を務めるほか、洗足学園音楽大学芸術監督・特別教授、京都市立芸術大学客員教授を務めている。

2024年指揮者生活60周年を迎えた。



©Yoshiki Kaneko

児玉 桃 [ピアノ] Momo Kodama, Piano

J. S. バッハからメシアンを含む現代作品まで、幅広いレパートリーと豊かな表現力で活躍を続ける国際派。幼少の頃よりヨーロッパで育ち、パリ国立高等音楽院に学ぶ。1991年、ミュンヘン国際コンクールに最年少で最高位に輝く。

ケント・ナガノ指揮ベルリン・フィル、小澤征爾指揮ボストン響、モントリオール響、フランス放送フィル、スイス・ロマン管等の世界の一流オーケストラとの共演も多い。デュett指揮NHK交響楽団のアジアツアー、テュメイ指揮関西フィルヨーロッパツアーではソリストを務めた。

作曲家細川俊夫からの信頼も厚く、数多くの細川作品を手掛けている。その代表作としてルツェルン音楽祭、ウィグモアホール、東京オペラシティ文化財団の共同委嘱による『練習曲集』をルツェルン音楽祭にて世界初演、東京オペラシティにて日本初演。ピアノ協奏曲「月夜の蓮」を北ドイツ放送響と世界初演、日本初演は小澤征爾&水戸室内管と行い、CD化もされ大きな話題を呼んだ。

2009年芸術選奨文部科学大臣新人賞、2023年芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

現在、カールスルーエ音楽大学教授。パリ在住。

Program Notes ● 相場ひろ [音楽評論]

セルгей・ラフマニノフについての大部の評伝(邦訳は森松皓子訳、音楽之友社刊)を著したマックス・ハリソンは、次のように述べている。「大半のロシアの交響曲においては、揺れ動く緊張状態に油を注ぐのは大きなスケールの和声模様というよりも、特殊主題の情緒的力感である。[中略] [ラフマニノフ]の場合には、異なった諸タイプの、テーマ上の題材と音楽プロセス、および気分や感情——これらが度合いの変化する対立の中に持ち込まれ、最終的にはそれらが個性的な、形式の上でも満足のいくやり方で解決される。」

ラフマニノフの交響曲に関しては、しばしば「ロマンチックで甘美ですらあるけれども、ドイツ=オーストリア系の本格的な交響曲と比べると形式的に弱い」といったことが言われる。しかしハリソンによれば、ロシアの交響曲は元来、形式や構造に感情の強度が優先するものであったということだ。アレクサンドル・ポロディンにせよピョートル・チャイコフスキーにせよ、感情表出の点で鮮烈な印象をもたらす旋律を交響曲に持ち込むのは得意であったけれども、それらを西欧の枠組みに押し込めて、構成要素に分解して展開したり、対位法の網の目からめたりすることには熱心でなかった。それに対しラフマニノフは、ロシア音楽の伝統に則りつつも、感情の強度で勝負するはずの要素を、ドイツ=オーストリア系音楽の屈辱の中に放り込んでみせたのだ。彼の交響曲では、いくつかの動機の組み合わせが強い感情を喚起する旋律を生み、さらに構成論理に合わせて発展していく。また滔々と流れる旋律に印象的な対旋律を添えて、対位法的な絡み合いを作り出しもする。ラフマニノフの音楽の魅力はその甘美さではなく、甘美さと構成的な思考が無理なく融合している点にある、というのがハリソンの主張だろう。

ひろがえて細川俊夫の音楽はどうか。「月夜の蓮」では、喚起されるべき心象や情景が書法のコンセプトを生み、音響の構成を決定していく。ドイツ=オーストリア系音楽の構成的な美学とも、感情表出に重きを置くロシア音楽とも、また素材が形式を生成するとしたクロード・ドビュッシーの思想とも異なるそのあり方には、彼が若くして留学したベルリンで師事した、20世紀を代表する作曲家のひとりであり、明確な心象喚起を強靱な音響の中で成し遂げたユン・イサンの影響があるのだろうか。

■ 細川俊夫：月夜の蓮 —モーツァルトへのオマージュ—

作曲の経緯 ▶ 2006年、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)の生誕250年を記念する企画のひとつとして、北ドイツ放送局は細川俊夫(1955~)に新作を委嘱した。モーツァルトのピアノ協奏曲から好きな曲を1曲挙げ、それと同様の楽器編成を用いて演奏することができるように、という依頼に対し、細川はピアノ協奏曲第23番イ長調K.488を選び、その編成をもとにピアノとオーケストラのための「月夜の蓮—モーツァルトへのオマージュ」を書き上げた。同曲は2006年、ハンブルクで、準・メルクル指揮ハンブルク北ドイツ放送交響楽団と児玉桃によって初演された。独奏に児玉を推薦したのは作曲家である。

「蓮の開花は▶
精神を開くこと」
(作曲家の言葉より)

細川によれば、蓮の花は仏教の世界観の中でもっとも尊い花であり、「蓮の開花は精神を開くことであり(自己の覚醒)、悟りと至福に至る深い祈りをも表している。蓮は池の水面下、泥の中に深くその根を下ろしている。茎は水中を伸び、蕾は水面をわずかに超えた所で空に向かって開こうとしている」と述べる。「月夜の蓮」においては、ピアノ独奏は蓮の花(人間)を、オーケストラはそれを取り囲む水と宇宙を象徴する。冒頭の長く続く嬰へ音(モーツァルトのイ長調協奏曲第2楽章が嬰へ短調であることに由来する)は水面に相当し、低音域は水面下の世界と、底に潜む泥の中の闇を、嬰へ音より高い音は空と大気を喚起すると、自作解説において細川は説明している。

「静かな明るい月夜、蓮の花は蕾のまま、月光を受けて、開花に向かって、夢にまどろむ。その夢の中には、かすかにモーツァルトの音楽への憧れ(西洋音楽への憧れ)が託される。」(細川俊夫)

[楽器編成] ピアノ独奏、フルート(ピッコロ持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、大太鼓、フット・バス・ドラム、タムタム、アンティークシンバル、風鈴、鈴(りん)、グロックンシュピール、ワイプラフォン、弦楽5部。

■ ラフマニノフ：交響曲第2番 ホ短調 op. 27

円熟期の代表作 ▶ セルゲイ・ラフマニノフ(1873~1943)は生涯に3曲の交響曲を残した。そのうち1907年にドレスデンで完成され、翌年サンクトペテルブルクで作曲家自身の指揮によって初演された第2番 ホ短調 op. 27は、交響詩「死の島」op. 29やピアノ協奏曲第3番 二短調 op. 30とほぼ同時期の作品で、彼の創作活動がもっとも脂ののっていた時期といえる。

短縮版、完全版の経緯 ▶ この作品は、チャイコフスキーやボロディンが切り開いたロシアの交響曲の伝統を継承すると同時に、同時代のグスタフ・マーラーやジャン・シベリウスらの影響を受けて充実した筆致が見られ、規模においても独創性においても3曲中群を抜く大作となった。ただし、あまりに長大となってしまったために、周囲から勧められて、演奏においては全体で約10分、300小節近いカットを行うことを許容してしまった。この短縮は作品全体のバランスを大きく損なうものであり、結果として長い間、作品の真価を理解するための妨げとなったことは否めない。カットを行わない完全全曲版が好んで演奏・録音されるようになったのは1970年代からであり、こんにちではこのかたちで採り上げられることが一般的である。

曲の構成と▶
音楽の特徴

第1楽章 ラルゴ〜アレグロ・モデラート。幕開けとなる長大な序奏では、冒頭のチェロとコントラバスと、それに続くヴァイオリンの旋律が全曲を統一する主題の萌芽を提示するなど、以後重要な役割を担う音形がいくつもあらわれる。アレグロ・モデラートになってすぐあらわれる第1主題は、冒頭の統一主題から派生したものである。抒情的な第2主題が提示された後展開部に入り、ふたつの主題と共に統一主題も活躍する。再現部では第1、第2主題に続いて統一主題が回想される。

第2楽章 アレグロ・モルト。特徴的なリズムと共に始まるスケルツォで、冒頭ホルンにあらわれる主題は、ラフマニノフが生涯にわたって偏愛したグレゴリオ聖歌の「怒りの日」の旋律に由来する。トリオではフーガ風の書法が繰り返される。

第3楽章 アダージョ。ラフマニノフの書いた音楽中、おそらく最もよく知られているもののひとつで、冒頭の甘美な旋律は映画やドラマ、CMなどでしばしば引用される。しかし対位的な楽器間の絡み合いや意匠を凝らした和声進行などが仕掛けられていて、その音楽は決してロマンチックな夢に終わらない。三部形式をとる。

第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ。ソナタ形式をとり、エネルギーあふれる第1主題に対し、弦楽器によって歌われる第2主題はラフマニノフらしいロマンチックな歌い口が際立つ。先行する楽章のさまざまな一節、特に第1楽章序奏の主題が回想されて全曲を強固に連関させていく。

[楽器編成] フルード3(ピッコロ持替)、オーボエ3(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、グロックンシュピール、弦楽5部。

未来に、社会に。 豊かさを。

オリックスグループは「豊かな社会」を実現するために、
社会福祉、青少年の育成、環境保全などの分野で支援活動を行っています。



児童養護施設などの子どもたちも、オリックス・パフォーマンスの野球観戦にご招待しています。

「SANGO ORIX」として、沖縄サングレー移住支援活動を推進しています。

世代を超えて地域の人々が子どもに食事や居場所を提供する「子ども食堂」への支援を行っています。

全国の肢体不自由児施設などに、車椅子でのまま乗車できる福祉車両や送迎用の車両を寄贈しています。

オーケストラコンサートへのご招待企画を実施するなど、音楽の振興に資する活動を行っています。



オリックス



3.15 [金] 16 [土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第21回
2024年3月15日(金) 14時00分 すみだトリフォニーホール
3月16日(土) 14時00分 すみだトリフォニーホール

●ベートーヴェン (1770-1827)

ピアノ協奏曲第1番 八長調 op.15 *

Ludwig van Beethoven: Piano Concerto No.1 in C major, op.15 *

約40分

- I. Allegro con brio
- II. Largo
- III. Rondo: Allegro

—— 休憩20分 ——

●シューベルト (1797-1828)

交響曲第8番 八長調 D.944 「グレート」

Franz Schubert: Symphony No.8 in C major, D.944 "Die Große"

約55分

- I. Andante - Allegro, ma non troppo
- II. Andante con moto
- III. Scherzo: Allegro vivace
- IV. Allegro vivace

[指揮] 上岡敏之

Toshiyuki Kamioka, Conductor

[ピアノ] アンヌ・ケフェレック *

Anne Queffélec, Piano *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

- 主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団
- 共催：すみだトリフォニーホール
- 助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(創造型支援))
独立行政法人日本芸術文化振興会

プログラム料計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に携帯電話の電源を切ってください。
演奏途中での入場、退場でのご迷惑および撮影はご遠慮いたします。



Profile



©GIZA

上岡敏之 [指揮] Toshiyuki Kamioka, Conductor

東京藝術大学でマルティン・メルツァーに指揮を師事し、作曲、ピアノ、ヴァイオリンも並行して学ぶ。安宅賞受賞。後にロータリー国際奨学生としてハンブルク音楽大学に留学し、クラウス・ペーター・ザイベルに指揮を師事。キール市立劇場ソロ・コレベティールおよびカベルマイスターとして歌劇場でのキャリアをスタートさせた。その後、ヘッセン州立歌劇場音楽総監督、北西ドイツ・フィル首席指揮者、ヴッパータール市立歌劇場音楽総監督、ザールラント州立歌劇場音楽総監督、ヴッパータール響首席指揮者等を歴任し、ヴッパータール市立歌劇場インテンダントの要職も務めた。ヴッパータール響とは二度の日本ツアーを行い、絶賛を博した。日本では、2016年シーズンより5年間にわたり新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督を務めた。2002年ホテルオークラ音楽賞、2007年第15回渡邊暁雄音楽基金 音楽賞・特別賞、2014年第13回藤原秀雄メモリアル基金賞を受賞。リリースしたCDはいずれも話題を呼ぶ。現在、コペンハーゲン・フィル首席指揮者、ザールブリュッケン音楽大学指揮科正教授。



©Caroline Douze

アンヌ・ケフェレック [ピアノ] Anne Queffelec, Piano

パリ生まれ。パリ国立高等音楽院を首席で卒業後、ウィーンでパウエル・バドゥラ=スコダ、イェルク・テームス、アルフレッド・ブレンデルに師事。1968年ミュンヘン国際音楽コンクール優勝（審査員満場一致）、翌年リーズ国際ピアノ・コンクール入賞。これまでに、ロンドン交響楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団、チューリッヒ・トーンハレ管弦楽団、フランス国立管弦楽団、フランス国立放送フィルハーモニー管弦楽団等のオーケストラと、サー・コリン・テイヴィス、スタニスラフ・スクロヴァチェフスキ、マレク・ヤノフスキ、デイヴィッド・ジンマン等の指揮者と共演している。フランス各地での主要音楽祭やBBCプロムス、日本ではラ・フォル・ジュルネTOKYOにも登場し高い人気を誇る。CDは、『サティと仲間たち』（ミラーレ）がティアパゾン・ドール賞を受賞。最新盤は『モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番&第27番』（リオ・クオクマン指揮パリ室内管弦楽団）。また、映画『アマテウス』ではサー・ネヴィル・マリナーとの共演でピアノ協奏曲を演奏し、話題を呼んだ。

Program Notes ●小室敬幸 [音楽ライター]

生まれ年が27年違いのルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）とフランツ・シューベルト（1797～1828）。前者は古典派、後者はロマン派に位置づけられることが多いけれども、没年はわずか1年違い。つまり2人は殆ど同じ時代を生きた作曲家なのである。

例えば交響曲を比べてみよう。シューベルトが交響曲第1番を完成させた1813年の段階で、ベートーヴェンは既に第8番まで書き上げている（ただし初演は第7番が1813年12月8日、第8番が1814年2月27日）。ところがベートーヴェンはその後しばらく交響曲から離れてしまうので、シューベルトが最後から2番目の交響曲である「未完成」を手掛けていたとされる1822年、ベートーヴェンはやっと「第九」に本腰を入れ始めるのであった。そして「第九」初演の翌年である1825年からベートーヴェンが亡くなる前年の1826年にかけて作曲されたのが、本日演奏される「ダレイト」である。完全にベートーヴェンと同時代の音楽なのだ。

■ ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第1番 長調 op.15

3番目の鍵盤協奏曲、
作曲の経緯

出版順の関係で“第1番”となってしまったが、ベートーヴェンが鍵盤楽器と管弦楽のために書いた協奏曲としては3番目の作品である。最初は1784年、まだ生まれ故郷のボンにいた頃、チェンバロのために作曲した協奏曲があるのだが、ベートーヴェン自身の書いた楽譜としては独奏パートが残っていない。

次は1786～90年にかけて、やはりボン時代に作曲されたピアノ協奏曲第2番 変ロ長調 op.19である。1792年にウィーンへ移住してからも改訂が重ねられ、1798年の第4稿で現在知られる形になった。そして3番目に書かれたこの第1番も、前述した第2番と並行して1793年から作曲されていた。1795年に一旦書き上げられるも、1800年に改訂が加えられて完成している。

充実した▶
オーケストラパート

第2番は明らかにモーツァルトのピアノ協奏曲をモデルにした作品であるのに対し、この第1番ではそれに加え、ハイドンやモーツァルトの交響曲なども意識したようで管弦楽の充実ぶりが増している。特にモーツァルトの弟子であるフンメルが同時期に手掛けたピアノ協奏曲第1番 長調 op.73と比べると、その違いは明白。フンメルはその後、ショパンの先駆になるような管弦楽が独奏ピアノの伴奏に徹する協奏曲を手掛けていくのだが、ベートーヴェンは後の第5番「皇帝」（1809）で顕著なように、管弦楽とピアノが拮抗するような協奏曲を目指した。この第1番

曲の構成と
音楽の特徴

はその走りとなった作品ともいえるだろう。

第1楽章は協奏ソナタ形式。まずは管弦楽がハ長調の第1主題を提示。リズム、音階、分散和音と素材はどれもシンプルだが、緊密に組み上げられていく。抒情的な第2主題は、柔らかな変ホ長調ではじまり、転調を繰り返してゆくのびぬくれ者のベートーヴェンらしい。ピアノが登場して変奏を加えていく2度目の提示部では、第2主題はト長調になるので定型通り。展開部のはじまりで再び変ホ長調となり、そこから明朗なハ長調とは正反対の陰りに満ちた音楽を聴かせる。

第2楽章はゆったりとした緩徐楽章で、三部形式。先ほどよりも更に柔らかな変イ長調ではじまり、独奏ピアノが中心となって抒情的なメロディが紡がれてゆく。木管楽器の和音によってピアノが弾く主旋律を支えるところからが中間部だ。初演ではベートーヴェン自身がソリストを務めたので、自らがどれだけ美しくピアノを歌わせられるのかを披露するための音楽でもあったのだろう。

第3楽章は快活なロンド形式だが、ソナタ形式的な要素も持っている。冒頭の第1主題はスケルツォに近いおどけた性格で、変奏されながら繰り返される。あいだに挟まれるクプレ(挿入句)は2つあり、1つ目はヴァイオリンとオーボエが奏ではじめる、裏拍が強調される不思議なメロディ、2つ目はピアノによって何度となく繰り返される短調のメロディだ。前者は終盤になってハ長調に転じるので、実質的な第2主題にあたる。

【楽器編成】ピアノ独奏、フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ シューベルト：交響曲第8番 ハ長調 D.944「グレイト」

シューベルトの死から10年ほど後、ロベルト・シューマンによって楽譜が発見されたことで、フェリックス・メンデルスゾーンの指揮で1839年に初演されたのがこの交響曲である。シューベルト自身も当然、生前から演奏されることを望んでいたのだが、演奏困難として2度もつばねられていたのだ。

作曲の経緯は1824年3月、友人の画家レオポルト・クーベルヴィーザーに宛ててシューベルトが書いた手紙から読み取ることが出来る。レオポルトの兄ヨーゼフはケルントナートーア劇場で働いており、シューベルトの最後のオペラ「フィエラプラス」(1823)の台本を書いていた。だがヨーゼフは女優と不倫したため職を失い、このオペラも(事前に検

聴かれなかった
シンフォニー

失意のなか、
希望を託して

閲官から台本の承認を得ていたが、台本が使いものにならないと言われて)舞台上演されなかった。

前作のオペラ「家庭争議」と続けて上演が叶わなかった絶望から、器楽曲の創作に情熱を注いだのだ。そして24年5月、ウィーンでは徐々にベートーヴェンの新作交響曲(つまり第九)が発表されるというニュースが話題となっていたようで、手紙でシューベルトは自分も同じような自主公演を開きたいと語っており、その目玉として考えていたのが「大交響曲(großen Sinfonie)」と綴られていた本作だったのだろう。

曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章は、序奏付きのソナタ形式。本作から受ける壮大な印象は、長さと密接に結びついている。雄大なホルンの主題ではじまる序奏もそこそこの分量があるけれども、楽譜の指定通りに提示部を繰り返すと、展開部の3倍以上の長さとなるのだ。展開部で主題を切り出して劇的に変奏していくベートーヴェンと異なり、シューベルトは歌うようなメロディの自然な連なりを重視していく……のだがさすがに再現部では色々の変更が加えられ、飽きられない工夫もされている。最終的にはホルンが吹いていた冒頭の主題が帰帰。オーケストラ全体で奏でられてクライマックスを迎える。

第2楽章は緩徐楽章で、2つの要素が入れ替わる五部形式。憂いが際立つ主部は、劇的な音楽と優しく明るい音楽でコントラストが生み出される。この主部の間に挟み込まれるかたちで2度登場する中間部は、長調が基調なはずなのだが物悲しさは増し、人生の深淵を覗き込む……。

第3楽章はスケルツォで、主部と中間部(トリオ)がそれぞれソナタ形式になっている複合三部形式(ブルックナーが同じような形式を採用しているが、その先駆といえる)。明るく明朗な主部と、肩の力が抜けたトリオのコントラストが印象的だ。

第4楽章もソナタ形式。やはり提示部を繰り返すと、展開部の3倍以上の長さとなる等、序奏こそないけれども形式上は第1楽章と似た傾向を持っている。ただし、音楽自体の性格としては繰り返されるリズムが重要になり、心地よい愉悅感を生み出す肝となる。既に触れた通り、本作は作曲者の生前に演奏されることはなかったが、この楽章を聴く限り、作曲中のシューベルトは希望に満ち溢れていたと思えてならない。「若い活力」と「円熟」……本来は相容れない要素が奇跡的に交わった傑作だ。

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦楽5部。